



# 文化博物館だより 第195号

2007年11月15日

みなさん、こんにちは。先週から風邪をひいていますが、なかなかすっきりしません。そろそろインフルエンザもはやりだす頃。みなさんも気をつけてくださいね。

## 早川和子さんが来られました！

11月11日(日) 企画展「絵で見る考古学展」の作者・早川和子さんが文博に来られ、似顔絵つきサイン会と講演会が行われました。



講演会での早川さん

デザインを志していた早川さんは、勉強していくうちにデザインは自分には向かないと思い、学校を卒業後、マッドハウスという会社でアニメ制作に携わります。その後、京都に移り住みましたが、関西にアニメ制作をする会社がなかったため、友人に誘われた発掘の整理員のアルバイトに従事することに。そこで小さな破片一つでお祝いをし、喜び合う研究者たちや「ナブンケン」という謎の団体に出会います。「ナブンケン」というのは「奈良文化財研究所」の略。当時、奈文研を知らなかった早川さんは、自分から頼んで行って行ったそうです。学生の頃には考古に興味はなかったし、遺跡の現地説明会の資料をつくる手伝いをしていても「こんな文字だらけの資料でよくわかるなぁ」と感心していたという早川さんですが、わからないなりに自分から関わっていく

ことで考古の世界に入り込んでいきます。

ある時、文字だけの資料に「絵を入れてみたら」と提案。アニメーターの仕事で鍛えた動きのある人間の絵が、評判を呼びます。こうして第一人者と呼ばれるまでになる考古イラストレーターの道が拓かれていきます。そのうち「奈文研」から平城京の絵の依頼を受けることになり、専門家に訂正を受けながら何度も何度も書き直し泣きながら描いたといいます。

現在では逆に、言われるがままに直すのではなく、主張もできるようになってきたそうです。

「建物だけなら建築の専門家がいる、私に絵が依頼されたのは人間が描けたから」。そして、早川さんが描きたいのも「共感を持てる人間」。絵を描くときも、古代の人々も今と変わらぬ悲しみや喜びがあったではないか、人々は力をあわせることで様々な苦難を越えていったのではないかと想像するそうです。「私は考古が好きなのではなく、考古に関わる人間が好き」とおっしゃられた早川さんの言葉が印象に残りました。



早川さんの絵とともに、明石市内の遺跡の遺物も並ぶ

今回は、サイン会の様子をお伝えします。お楽しみに！